

令和 6 年 6 月 24 日現在

機関番号：84602

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K13238

研究課題名（和文）外的要因と内的要因からみた古墳時代須恵器の様式変化に関する研究

研究課題名（英文）A study about the style change of Kofun-period Sueki

研究代表者

岩越 陽平（Iwakoshi, Yohei）

奈良県立橿原考古学研究所・調査部調査課・主任研究員

研究者番号：60815067

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題では古墳時代の日本に朝鮮半島から伝わった、窯を伴う高度な焼成技術によって生産された焼き物である「須恵器」を対象とした。須恵器の通時的変化の過程で認められる器種の交替、意匠の刷新などの様式的な変化に焦点を当て、その実態と背景を明らかにすることを目的として研究を実施した。奈良県の須恵器生産地や古墳を対象としたケーススタディーや全国的な須恵器生産と古墳築造動向との関係を検討し、古墳における儀礼が須恵器の変化をリードした可能性や、広域的なネットワークにより、有蓋高杯などの特定の器種が共有される状況を明らかにした。また、群集墳を対象として、集団の特性と器種選択の関係を検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題では古墳時代の日本で生産された硬質の焼き物である「須恵器」を対象とした研究を通して、その変化の背景や、列島内での技術の共有の状況から読み取れる王権や地域間の関係を検討し、当時の社会の一端に迫ろうとした。検討の結果、須恵器生産地の動静や須恵器の変化が各地の古墳築造と深い関係を持つことなどが明らかとなった。今回得られた研究成果は、古墳時代の地域開発や列島内の地域間関係の解明など、今後の古墳時代研究にも資することが期待できる。

研究成果の概要（英文）：This research project focuses on “sueki”, a type of pottery produced using advanced techniques involving kilns, which was introduced to Japan from the Korean Peninsula during the Kofun period. The research focuses on major changes in “sueki” in 6th century, such as the replacement of vessel forms and innovations in design, i.e., stylistic changes, and aims to clarify the background of these changes. Case studies of “sueki” production sites and kofun in Nara Prefecture and the relationship between “sueki” production and kofun construction trends nationwide were conducted, and it was revealed that rituals in kofun may have led to changes in “sueki”, and that specific vessel forms were shared through wide-area networks. In addition, the relationship between the characteristics of the group and the selection of vessel types was examined for clustered kofun.

研究分野：古墳時代

キーワード：古墳時代 須恵器

1．研究開始当初の背景

本研究課題では、日本列島の国家形成期にあたる古墳時代において、朝鮮半島から伝えられた窯を用いた専門的な技術によって生産が開始され、古墳時代の日本列島において生活用・儀礼用の土器として広く普及した焼き物である「須恵器」を研究の対象とした。須恵器の研究には、その生産に必要な高度な技術的水準から、中心周縁関係、地域間関係、対外交流、社会経済、地域開発、手工業生産、部民制など多様な論点が内包され、日本の国家形成の問題に迫りうる主要な研究対象の一つとの認識があった。

2．研究の目的

須恵器は日本列島での生産開始後、韓国の陶質土器の影響が強く残る初期須恵器の段階から、日本化（定型化）の段階へと向かうが、定型化以後も意匠や器種組成には大きな画期も含めたいくつもの変化が認められる。特に、古墳時代中期（5世紀）から古墳時代後期（6世紀）へ、また、古墳時代から飛鳥時代（7世紀）という、中央政権の動態や国家体制の大きな変化がある時期の前後には、須恵器にも様式的な変化が起きる。その背景には様々な国内的な要因や、朝鮮半島の陶質土器の要素を取り入れた可能性などの外的な要因が関わっていると推測された。

そのような須恵器の意匠・器種組成などの様式的な変化や生産史上の画期の実態とその背景を明らかにすることを本研究の目的とした。

3．研究の方法

本研究課題では、日本国内の資料と朝鮮半島で確認されている類似資料の両面からの検討を目指した。後者については、特に朝鮮半島との関連が指摘されることもある、「特殊須恵器」・「装飾付須恵器」と朝鮮半島の陶質土器との比較検討を目的としたが、2019年以來流行した新型コロナウイルスの感染拡大により、研究活動に大きな支障をきたした。しかし、情報収集は継続的に進め、得られた研究成果については今後の文章化を予定している。

日本国内の須恵器の研究については、須恵器窯跡・古墳・集落などからの出土資料の集成、分類、観察という基礎的な方法で研究を行ったが、とりわけ、代表者が以前から取り組んできた研究で得られた須恵器生産と古墳築造が関連するという見通しの下、須恵器生産地と古墳築造動向との関係、古墳出土須恵器の器種組成の比較などに重点を置いた。また、普遍的に存在する器種以外に、ある程度生産量や分布が限定される特定の器種に注目することで、須恵器の地域色、生産地間の交流のあり方などから、須恵器の変化の要因に迫ろうとした。このほか、群集墳を対象とした検討を行うことで、須恵器の流通や器種選択のあり方を探ろうとした。

4．研究成果

初年度（2020年度）や2年度目（2021年度）は、新型コロナウイルス感染拡大による制約も受ける中で、近隣の自治体での資料調査や基礎的な資料集成に重点を置いた研究活動を行った。その成果としてまず、奈良県や大阪府の群集墳を対象に、副葬された須恵器の器種の共通性や差異を抽出し、渡来系集団などの集団の特徴が器種組成に反映されるとした論考を発表した（文献 ）。この成果については、このような須恵器受容の集団差が、生産の変化にどのような影響を及ぼしたのかという点で、今後も検討の余地を多く残している。

また、同じく初年度から2年度目の研究成果をまとめたものとして、代表者の所属機関がかつて発掘調査を実施した古墳の出土資料の整理や、その近隣の須恵器生産地の資料や古墳・集落の出土資料などを検討し、成果を発表した（文献 ）。この成果は、それま

で古墳築造が停滞していた奈良盆地南部の五條市域で、6世紀前半に有力古墳が築造されるとほぼ同時期に近隣に須恵器生産地がつけられるということ、また、その古墳に須恵器長脚1段有蓋高杯のような希少な器種が供給されていること、また、そのような様相が和歌山県の岩橋千塚古墳群と共通しており、地域間の交流を示す可能性があるという点に要約できる。このほか、五條の須恵器生産地の供給圏などについても若干の検討を行った。

上記の成果のうち、須恵器生産地と古墳築造動向の関連については、筆者を含めてこれまでも多くの指摘があったが、希少な器種あるいは特定の器種が須恵器生産地周辺の古墳に供給されたという成果は筆者のオリジナリティであると考えている。この成果は、これまで以上に詳細に古墳築造と須恵器生産を結びつけることを可能にすることで、地域開発などの議論に寄与するほか、特に6世紀前半頃に様式的な変化がみられる須恵器がどのような層に受容されていくかを明らかにした点で、須恵器の変化の背景に迫りうるものである。

2年度目までに得られたこのような成果を基に、研究の3年度目および、期間延長を行った最終年度(4年度目)には、検討の範囲を全国に広げた。新型コロナウイルスの感染拡大の緩和を受け、近畿圏を中心に、中・四国方面、東海地方、関東地方の須恵器窯跡や古墳から出土した須恵器の調査を実施した。この結果、五條市域の古墳と須恵器生産地の関係について確認したような状況が、6世紀前葉～中葉の全国各地の古墳や須恵器生産地においても認められ、仮説の蓋然性を高めることができた。また、そのような古墳、須恵器生産地の分布を検討することで、当時の中央政権やその支援勢力とされる勢力間のネットワークとも一部関連することを示した(文献)。また、東海地方では周辺地域と状況が異なるといった、今後につながる示唆も得られた。このような成果については、研究会や講演会等でも発表を行った。

本研究課題ではこのような形でいくつかの成果を得ることができたが、今後の研究展開に与える影響として、特に古墳築造動向と須恵器生産地の関係性の研究の深化による、古墳時代の地域開発の議論等の寄与、また、古墳時代の政治変動と須恵器生産との関係を示したことによる、古墳時代の手工業生産の議論への寄与などが期待される。

今後はこのような検討の対象時期や範囲を広げつつ、個別の分析の精度を高め、文章化も行っていきたい。

<引用文献> 岩越 陽平「器種構成からみた群集墳の須恵器副葬について 大和・河内地域のいくつかの群集墳の事例から」『群集墳研究の新視角』古代学研究会、2021、91-113

岩越 陽平「南阿田大塚山古墳出土須恵器についての考察」『南阿田大塚山古墳』奈良県立橿原考古学研究所、2022、61-70

共著「吉野川流域古墳文化の研究」『研究紀要』由良大和古代文化研究協会、2022、1-42

岩越陽平「須恵器からみた東谷山古墳群の時代の尾張・畿内とその周辺」『東谷山古墳群の時代と須恵器研究』しだみゆー歴史講演会・東海古墳時代研究会、2024、16-23

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 岩越陽平（共著）	4. 巻 26
2. 論文標題 吉野川流域古墳文化の研究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 由良大和古代文化研究協会 研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩越陽平	4. 巻 -
2. 論文標題 器種構成からみた群集墳の須恵器副葬について 大和・河内地域のいくつかの群集墳の事例から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 群集墳研究の新視角	6. 最初と最後の頁 91-113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩越陽平	4. 巻 -
2. 論文標題 南阿田大塚山古墳出土須恵器についての考察	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 南阿田大塚山古墳	6. 最初と最後の頁 61-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岩越陽平	4. 巻 -
2. 論文標題 須恵器からみた東谷山古墳群の時代の尾張・畿内とその周辺	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 東谷山古墳群の時代と須恵器研究	6. 最初と最後の頁 16-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 岩越陽平
2. 発表標題 奈良県五條市の事例にみる須恵器生産地と周辺古墳の関係
3. 学会等名 考古学研究会関西例会第233回研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 岩越陽平
2. 発表標題 須恵器からみた東谷山古墳群の時代の尾張・畿内とその周辺
3. 学会等名 しだみゅー歴史講演会・東海古墳時代研究会 東谷山古墳群の時代と須恵器研究（招待講演）
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------